

# 常なる磐

つねなる いわ seasonⅢ

令和 4年10月28日(金)

その2 通算273号

## ◇ 成長が見えるということ

中学校勤務がほとんどを占める自分にとって、『中学校における「文化祭」「合唱コンクール」「体育大会」「応援合戦」といった行事は、学級づくりに欠かせない』と断言できるほど、意義深さや高い価値があると認識している。

共通する目標に向かって級友と励み、力を合わせて一つのを創り上げようとする行為は尊く、【集団貢献の価値観形成】【集団への寄与を通じた自己肯定感の実感】【成長の自己認識力】【感動力】など、行事を通して得られる無形の力は、その後の人生を支える貴重な経験として備わる。携<sup>たずさ</sup>われる担任は、本当に幸せだ。

小学校の「学習発表会」も中学校行事と同様に意義深い。けれども、「似て非なるもの」でもある。その微妙な違いとは、「担任のアプローチの仕方」の違いによる「成長の角度」と「子供に備わる成長のための基盤力」であると感じている。



「アプローチ」を簡単に紐<sup>ひもと</sup>解けば、中学校は「ファシリテーター」的な役割・「引き気味で生徒を見守る構え」に対し、小学校は「完成形を見定めて児童を導く、計画的な指導」「児童に寄り添う丁寧な支援」「児童のよさ・持ち味を引き出す個別最適な指導」とでも言えよう。小学校の教師の子供へのアプローチには圧倒的な濃さがあり、熱く、きめの細かい担任教師の指導なくして、演目の成功はない。

「アプローチの仕方の違い」は、教科担任制の中学校の担任が生徒と接する限られた時間量に対し、小学校の担任は、児童の学校生活のほとんどの時間を共有する。この圧倒的な時間の共有を有効に活用し、担任は一人一人の児童のことを的確に把握して、巧みに指導・支援に生かす。本校の教師を含め、小学校の担任は、児童のよさを引き出しながら、児童を乗せてやる気にさせる指導が本当にうまい。

忘れてならないのが、圧倒的な時間共有の中で積み重ねてきた「師弟の信頼関係」の存在だ。『乾いたスポンジが水を吸収するがごとく児童が教師の指導を受け入れる』のは、信頼関係があればこそであり、この目に見えない繋がりが児童の成長・伸長の角度を大きくする。だから、こちらがびっくりするほどの勢い（※前述の「鋭角的に急伸する成長の角度」）で児童は伸びるのだ。

本校に特化したよさもある。演目に厚みをもたせるために、上・中・下学年それぞれ2学年合同で演目を作り上げるシステムの利点だ

例えば下学年の場合、1・2年生あわせて16人の児童の指導に3名の担任教師が指導にあたることができた。加えて、下学年の授業を担当する島田先生も指導に協力してくださった。しかも、伊藤貴先生、加藤先生、島田先生は演技・歌唱・合奏指導に造詣が深く、しかも、3名それぞれが異なる方向から切り込む指導ときている。児童のやる気と力量が、めきめきと向上するはずである。

さらに若手の飯田先生にとっては、毎回の練習時間が「ベテラン教師の巧みな指導の技」を吸収する最良の機会となったはずである。

もう一つのポイント「子供に備わる成長のための基盤力」について述べたい。先述のように学習発表会の練習を通して児童は大きく成長するが、中・上学年を見ていると、発表する姿から一段階上げた積み上げのある成長をうかがい取ることができた。これは、発達段階に即した演目設定や演目のねらいといった外的要因以外の【積み上げのある成長】を意味する。

例えば中学年の場合、発表に必要な基盤を下学年で学び、習得できているからこそ、演技そのものや演技のつなぎ、間合い等に深みを出すことができる。中学年以降、見る者がぐっと引き寄せられるのは、基盤に「上積みされた深み」があるからである。この「深み」が、観客の涙腺を緩ませるとも言える。

上学年では、演目のシナリオづくりに児童を参加させている。これは児童自身にやる気をもたせるとともに、中学生への基盤づくりという意味をもつ。中学校の行事の基盤は、【生徒の自主性・主体性・協調性】といった生徒自身によるところが大きい。これが裏面・冒頭の成果を生むのである。上学年の最大の成長は、積み上げを重ねる中で、「中学生に向けた基盤づくり」ができたことにあるのだ。

それにしても本当に素晴らしい学習発表会であった。全校児童と教師に大拍手。